

絡条体圧痕文を有する土器について

—中込遺跡出土の資料を中心に—

浅利 司

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1. はじめに | 4. 中込遺跡出土土器の編年的位置づけ |
| 2. 中込遺跡出土土器 | 5. 関東地方土器群との関係 |
| 3. 編年的研究の現状 | 6.まとめと問題点 |

1. はじめに

昨年の初夏、山梨県北巨摩郡長坂町中込遺跡で、道路建設とともに発掘調査を行なった。その際、注目すべき絡条体圧痕文を有する土器が出土した。

言うまでもなく、絡条体圧痕文とは、棒や縄などの軸に細い紐状のものを巻き付けて原体とし、これを土器の器面に押しつけて得た文様のことである。絡条体圧痕文に関しては1941年に山内清男氏が、子母口式土器の文様要素のひとつであるとしてから注目されはじめ、その後しばらく、絡条体圧痕文イコール子母口式土器という認識が一般化した。しかし近年になって、子母口式以外にも絡条体圧痕文が存在することが指摘されており、この位置づけをめぐっていくつかの論考が出されている⁽¹⁾。

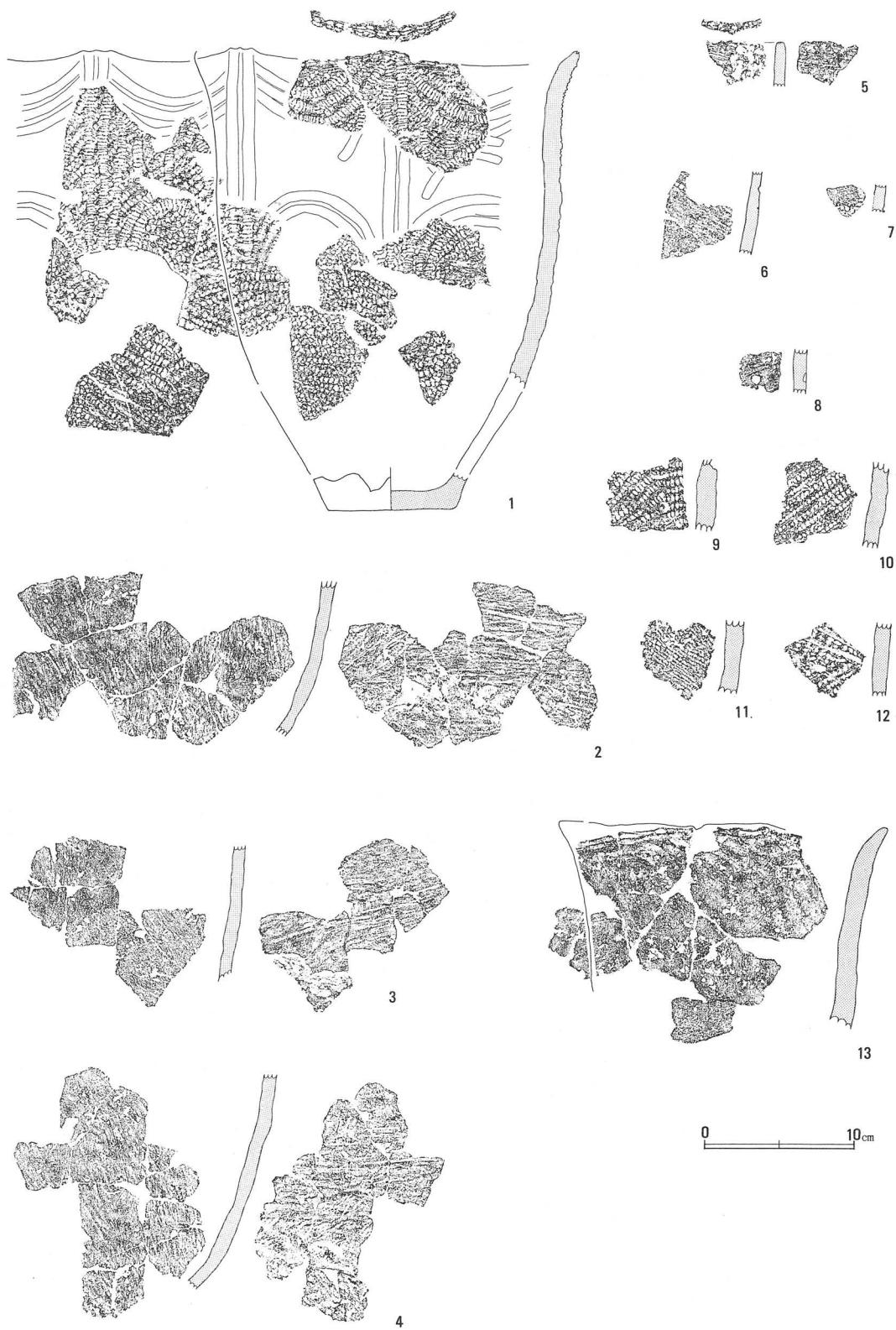
本稿は、中込遺跡の報告書をまとめるにあたり、出土した資料を中心に、絡条体圧痕文土器の編年をめぐる問題について若干の私見を述べてみるものである。何分にも未熟な考え方であり、先学諸氏の批判を乞う次第である。

2. 中込遺跡出土土器

中込遺跡の詳細な説明は報告書⁽²⁾に譲るとして、ここでは出土状況と土器そのものの簡単な説明をする。

中込遺跡は、長野県との県境に近い、山梨県北巨摩郡長坂町大井ヶ森にある。付近は八ヶ岳南麓の日当たりのよい緩斜面になっており、湧水が多く水が豊富な場所である。遺跡は、ここを流れる古柏川の小規模な河岸段丘上に立地する。発掘の結果、遺構はまったく検出されなかった。したがって、これから扱う土器はすべて包含層からの出土である⁽³⁾。

絡条体圧痕文を有する土器（図1-1）は、器形及び文様構成の分かるものが1点出土した。8单位の小波状口縁を有し、口縁部がやや外反する。胴部上半はほぼ直線的にのび、胴部下半は緩やかに屈曲し底部にいたる。底部は胎土・焼成・色調などから同一個体として扱ったが、胴部と接合しないため確実に平底になるとは断定できない。口径は25.5cm、底径は8.5cmであ



第1図 中込遺跡出土土器

る。文様はLRの単節縄文を地文とし、その上に長さ35~36mmの絡条体を連続的に押しつけて、直線と弧を組み合わせた文様を構成している。まず口縁の波頂部直下にたて方向に直線を描き、器面を8等分したのち、その間を弧で埋めている。口唇部にも絡条体圧痕文が施される。特に波頂部は、絡条体を押しつけることにより3つの波頭があるような効果をあげている。絡条体は、比較的柔らかいもの（縄か）を軸に、直径1.5mmほどの無節の縄を、9本／20mmの密度で巻き付けている。軸が柔らかいため、圧痕がイモ虫状になっているところもある。口縁部にはこの絡条体をこすり付けた、絡条体条痕文がわずかではあるが認められる。裏面は、口縁部付近を丁寧になでている以外はやや荒く、纖維痕が認められる。条痕文は認められない。色調は黄褐色で、胎土には、纖維と長石と不透明な小礫を含む。焼成は良好である。

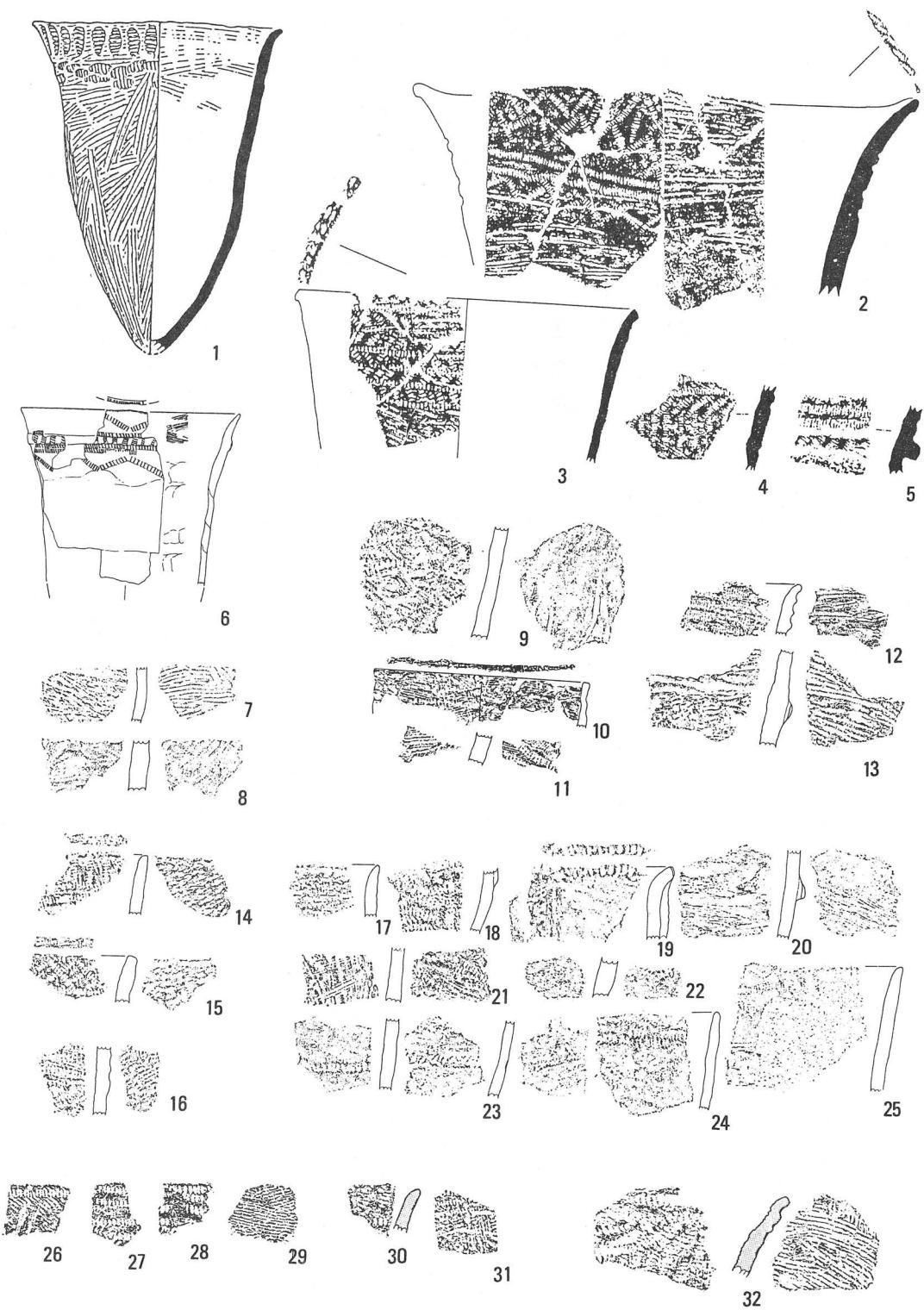
この土器とほぼ同時期と思われる地点・層位から出土した土器群についても若干触れておこう。図1-2・3・4は、表裏に条痕及び擦痕を有する。表面の条痕は、器面に対してやや右斜め下方向に浅く施される。施文具は、条痕（擦痕）が細かくて不規則であることから、柔らかい纖維状のものであると考えられる。裏面の条痕は、器面に対して横方向に施文されている。施文具ははっきりしないが、条痕の幅が広く、断面が凹字状になっていることから、硬質のものを使ったと考えられる。色調は赤褐色、胎土には纖維・長石・赤色の小礫を含んでいる。5は口唇部に貝殻の腹縁部を押しつけている。6・7にも貝殻の腹縁部を連続的に押しつけた文様がみられる。裏面の条痕はあまり明瞭ではない。8は直径4mmほどの刺突痕が認められる。刺突しながらねじったような痕跡である。裏面には横方向の条痕が残る。13は、口縁部がわずかに外反し口唇部が尖った器形である。器壁は厚いが纖維を多量に含むため脆弱である。金雲母を大量に含んでおり、他の土器とは峻別できる。色調は灰褐色である。これらの他に、9・10・11といった、胎土に纖維を含み表面に縄文を施すもの、さらにその縄文のうえに沈線を施す12等があるが、やや離れたところからの出土である。

以上、中込遺跡出土の土器について簡単に説明をした、この中で絡条体圧痕文を有する土器に関して注目すべき点は次の7点である。

- ①. 地文に縄文を施している。
- ②. 柔らかい軸の絡条体（縄軸絡条体）を使用している。
- ③. 文様構成が直線と曲線を組み合わせた特徴的なものである。
- ④. 裏面には条痕をもたない。
- ⑤. 平底である可能性がある。
- ⑥. 口唇部にも絡条体圧痕文が施される。
- ⑦. 条痕文土器・貝殻腹縁文土器を伴出する。

3. 編年の研究の現状

絡条体圧痕文土器の編年的位置づけについては、関東地方と諏訪湖を中心とする長野県地方とで別々に進行してきた感がある。



第2図 絡条体圧痕文土器(1) 1.丸山遺跡, 2~5.男女倉遺跡C₂地点,
6~8.高風呂遺跡39号銃住, 9~13.同43号住, 14~25.同40号住, 26~32.中島A遺跡



第3図 絡条体圧痕文土器(2) 1～4. 繕棚B遺跡, 5～16. 膳棚B遺跡
遺構外, 17～20. 寺野遺跡, 21～32. 梨久保遺跡23号住, 33～43. 堂の前遺跡

長野県内での研究はここ数年で急速に進展した。それは、東海地方の土器を伴出する遺跡が調査されたことが大きく影響している。具体的には、原村阿久遺跡（笹沢ほか1982）、茅野市高風呂遺跡（守矢ほか1986）、膳棚B遺跡（百瀬ほか1986）、中島A遺跡（同左）、岡谷市梨久遺跡（小沢ほか1986）、塩尻市堂の前遺跡（小林ほか1985）等である。これらの報文中で報告者らは東海地方の土器を基軸にして意欲的に編年作業を進めている。宮下健司氏はこの成果をふまえて、絡条体圧痕文系土器を4段階に分類し編年している（宮下1988・1989）。氏によると、第1の段階は、表裏に条痕文が施され、それを地文にして、「イモ虫」状の太い絡条体を口縁下に施文するもので、絡条体で文様をつけるという装飾的要素の少ない土器である。例として牟礼村丸山遺跡をあげている。第2の段階は、裏面には条痕文を施さないで、山形や「X」字状のモチーフをもつものである。例として梨久保遺跡、膳棚B遺跡、高風呂遺跡40号住居をあげている。第3の段階は撚糸文を地文とする土器群をあてる。例として梨久保遺跡、青木沢遺跡をあげている。第4の段階が最終段階で、前期初頭の撚糸文・縄文土器に伴う土器としている。例として梨久保遺跡や松川村有明山社遺跡をあげている。伴出する東海系土器は、第2段階で入海Ⅱ式～石山式、第3段階で石山式～天神山式の土器である。

この編年案は大枠で首肯できると思われるが、もう少し細かく検討してみたい。まず、編年の大きな柱になっている地文の変化のなかで、条痕文が施される第2の段階までが、さらに細かく分けられそうである。条痕文は表・裏の違いの他に、貝殻によるものと絡条体によるものの2種がある。小沢由香利氏が指摘しているように、絡条体条痕文は貝殻条痕文よりも後出的で、貝殻条痕文の疑似文様として出現した可能性がある（小沢ほか1986）。高風呂遺跡の住居址では両者が入り混じって出土しており、住居址ごとにその比率が異なるのが確認されている。しかも貝殻条痕文が主体となる住居は古く位置づけられる。さらに「華飾的なもの」は、絡条体条痕文の土器により多く伴う傾向が認められるという。このことから、はっきり段階的に分けられるかどうかは分からないが、貝殻による表裏の条痕文を用いる第1の段階のあとに、絡条体条痕文を表裏にもつ絡条体圧痕文土器が存在し、第2の段階（裏面の条痕の消失）がこれにつづくと言えるのではないだろうか。

文様構成については、宮下氏は第3段階以降はふれていないが、氏が編年の基調としたと思われる膳棚B遺跡等の報文中で、百瀬忠幸氏は、撚糸文を地文とし「繊細な絡条体圧痕文を横位と縦位のみの構成を似て施文したもの」が3期以降につづくのではないかとしている。例として塩尻市の青木沢遺跡をあげている。たしかに梨久保遺跡23号柱や75号柱の資料をみても、撚糸地文に上記のようなモチーフが認められる。しかしながら、同時に曲線的な施文や斜位の施文等も少なからず認められるのである。必ずしも、横位と縦位のみに限られることはないといえよう。したがって、当段階以降のモチーフを横位を縦位のみのものに限らず、曲線的なモチーフ・斜位のモチーフを含めて考えたほうが良いように思われる。4で述べるが、中込遺跡出土のものも、やはり曲線的なモチーフを有しており、第3の段階以降に位置付けられる可能性が高いのである。さらなる細分と位置づけは、資料の増加を待ってからにしたい。

4. 中込遺跡出土土器の編年的位置づけ

上記の考え方を参照にしつつ、中込遺跡出土の絡条体圧痕文土器の編年的位置を考えてみたい。まず最初に問題にすべきは、縄文を地文に用いている点であろう。しかしこの類例は著しく少なく、末だに分析に耐え得るまとまった資料は発表されていない。上記の遺跡中では、高風呂遺跡でC種として紹介されているのみである。高風呂遺跡のC種は、裏面にハケまたは絡条体条痕文が施文され、表面には密に軸巻きされた絡条体圧痕文が菱形・山形に施文されているものである。纖維の量は比較的多い。出土数量が限られているためか、その編年的位置については報文中では触れられていない。条痕文が裏面に施されることからすると、古手の傾向を示すといえる。しかし、文様構成自体は宮下氏の言う第2の段階に相当する。このことから当土器の編年位置づけは、第2段階以前のものの可能性が高い。梨久保遺跡では、絡条体が直接施文されていないものの、撚糸文を地文にする絡条体圧痕文土器に伴って、縄文が羽状に施された土器が出土している。口縁付近に隆帯が貼付されており、報告者である小沢氏は、この土器群を前期初頭（花穂下層式初期）に位置づけられるのではないかとしている。同様な例としては、長門町中道跡（児玉ほか1984）から出土している羽状縄文を主体とする土器群がある。報告者により「中道式」の型式名が提唱され、やはり前期初頭に位置づけられている。

中込遺跡出土のものは、2で述べたように表裏ともに条痕文が施文されていないので、新しい傾向（第3段階以降）を示している。文様構成も曲線的な圧痕を規則的に施していることから、同様な傾向を示していると思われる。さらに地文の縄文が羽状に施文されているのはより前期的な手法であると考えると、宮下氏の第3の段階以降に位置づけられる可能性が高い（梨久保遺跡の縄文施文の例などを重視して考えると、あるいは第4の段階にまで下るかもしれない）。

これをさらに傍証するのは、伴出した土器群である。数片の出土なので断定は難しいが、貝殻腹縁を山形に押しつけた土器（第1図6・7）は、関東地方の打越式の土器に類似する。これと同一個体と思われる第1図-2～4の胎土、調整、色調も打越式土器に非常によく似ている。

調整・文様の変化	東海地方	関東地方	遺跡名
表裏の貝殻条痕・「イモ虫」状の太い圧痕 表裏の絡条体条痕・山形「X」字状のモチーフ	？ 入海Ⅱ式		丸山遺跡 高風呂遺跡 高風呂遺跡
絡条体条痕文地文・山形「X」字状のモチーフ(?)	石川式		膳棚B遺跡 寺野遺跡
撚糸文地文・縄文地文・横位、曲線的モチーフ	天神山式 塩屋上層式	打越式 神之木台式	中込遺跡 梨久保遺跡
撚糸文・結節羽状縄文にともなうもの・横位、縦位、曲線的モチーフ(?)		下吉井式	梨久保遺跡

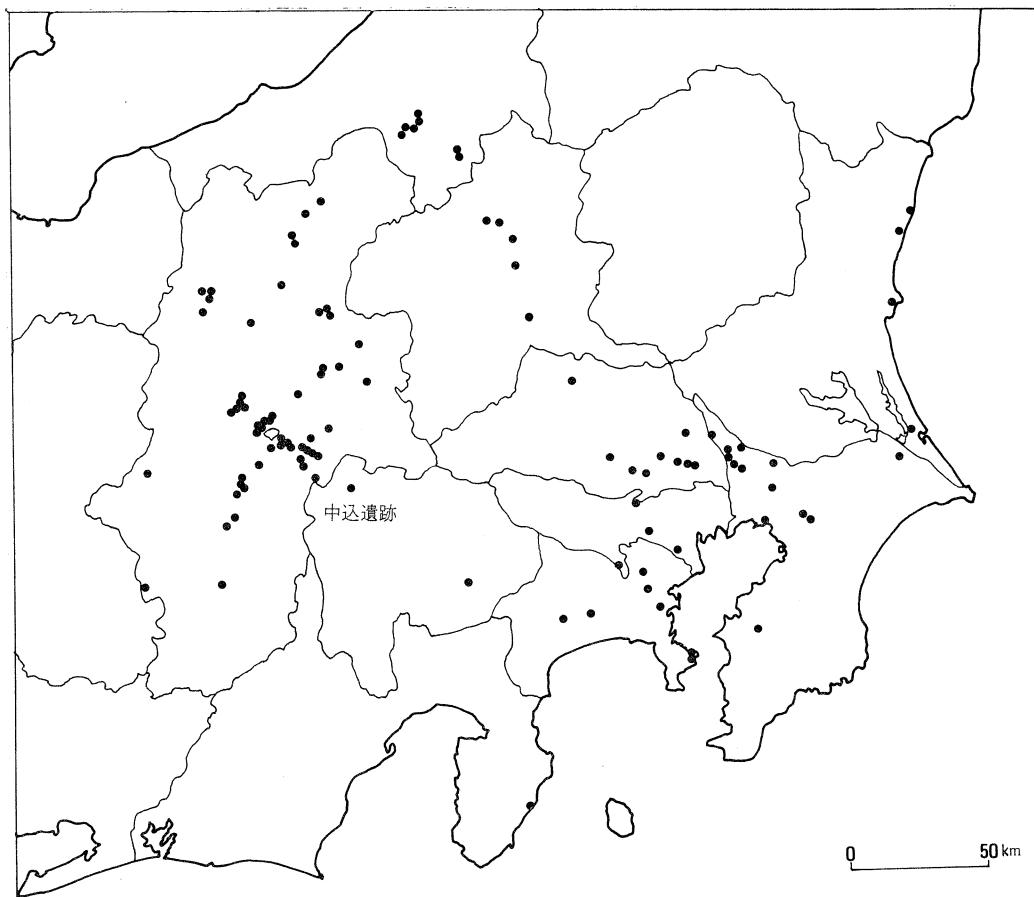
編年試案

仮に打越系の土器であるということが許されるならば、打越式土器が東海地方の石山式～天神山式に併行するとされていることから、中込遺跡の絡条体圧痕文土器は第3の段階に比定される可能性が高いと言える。

以上の事実を総合すると、中込遺跡出土の絡条体圧痕文土器の編年的位置づけは、縄文時代草期終末（東海地方の天神山式前後に併行）、宮下氏の言うところの第3の段階～第4の段階のはじめとすることができよう。そして、これまでの絡条体圧痕文系土器の編年位置づけに、縄文を地文とする絡条体圧痕文の存在を加えなければならないであろう。

5. 関東地方の土器群との関係

近年の関東地方における草期末の土器編年は、茅山上層式と花積下層式の間をうめてゆくという形で進行してきた。すでに確立されている東海地方の土器編年を利用しつつ、その概要はかなり明らかになってきている。この中で、絡条体圧文を有する土器群は、東海地方の上の山式～入海I式に併行する時期に、複数の型式にわたって存在するという位置づけがなされてい



第4図 繞条体圧痕文土器出土遺跡分布図（宮下1989に加筆修正）

る。その初現は貝殻腹縁文の模倣にあり、終末は貝殻腹縁文への転換にあるという（神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983・神奈川考古同人会 1984）。

この編年観にはいまだ検討すべき点もあるようであるが、これを以て、前述の編年と比較検討すると以下のようなことが言えよう。絡条体圧痕文の存続的期間には差がある可能性が大きい。初現については両者ともに上の山式に併行するとされているが、終末については中部高地では前期初頭にまでも残るのに対して、関東地方では草期末、神之木台式期には存在しない。このことは、原田昌幸氏が示唆しているように（原田 1984）、両地域に系統差を考えさせる。図4に絡条体圧痕文土器を出土した遺跡の分布図を示したが、これをみても山梨県を空白域として、中部高地と関東地方に分かれる。今後の資料の増加により、山梨県地方の空白部が埋められていく可能性もあるが、現在までに破片さえも確認されていない甲府盆地の状況も考えると⁽⁴⁾、長野県下のように集中的に出土する可能性は少ないと言えよう。分布の点からも両地域の独立性が想定できる。初現から発展過程のある時点まで同様な変遷をたどり、草期末のある時点（東海地方の天神山式期にあたり）からそれぞれ独自の道をとったのであろうか。出現過程から終息過程の系統的な分析を両地域ごとに詳細に行ない、これを付き合わせることにより両者の関連を明らかにしてゆく必要がある。

6.まとめと問題点

中込遺跡出土の絡条体圧痕文土器の編年的位置づけを中心にして、若干の私見を述べてきた。これをまとめると以下のようになる。

- ①諏訪湖を中心とする長野県地方の絡条体圧痕文系土器の編年は、器面の調整・地文の変化を基軸として草期末から前期初頭まで数段階に編年できる。
- ②中込遺跡のものはこの内の後半の段階、早時の終末に位置づけられ、関東地方の打越式期に併行する。
- ③絡条体位圧痕文系土器は長野県地方と関東地方とでは、異なった在り方を示す。特に早期終末のある時点からは著しく異なる。

解明された事実はあまりに少なく、残された問題ばかりが目立ってくる。まず、長野県地方における絡条体圧痕文の成立がいかなるものであったのか。どのような系譜のもとにいつ成立するのか。男女倉遺跡C₂地点出土の一群に対して芽山下層式との類似性を指摘する意見もある（笹沢ほか1975）が、確実な供伴関係はない。新潟県地方の資料を扱った小熊氏⁽⁵⁾は、その母体を鶴ヶ島台式周辺の幾何学模様に求めている。これが長野県地方にも同様に言えることなのであろうか。関東地方の貝殻施文からの変化とあわせて、今後の課題である。また、その終息についても検討が必要である。これはあくまで予見としてあるが、中道遺跡で指摘されている「原体縄軸巻き回転撲糸文」との関連に注意する必要があるのでないだろうか。いずれにせよ、関東地方とは違った終息を考えねばならない。このほか、早期最終末におかれている関

東地方の土器との関連にも注目する必要がある。甲府盆地東部の釧迦堂遺跡群からは神之木台式の良好な資料が出土しているが（小野ほか1986）、絡条体圧痕文は1片も見られない。一方、ほぼ併行すると思われる時期の長野県地方では、絡条体圧痕文土器に神之木台式土器が伴うことはほとんどない。地域的にそれほど遠くない両地域で、これほど異なるものであろうか。あるいは、編年的に修正が必要なのであろうか。東海地方の土器群も含めて今後の伴出関係に注目したい。

以上、中込遺跡の資料を中心に述べてきたが、資料数が非常に限られているうえ遺構にも伴わないもので、分析には限界がある。今後、より正確な伴出関係を把握できる成果が蓄積されることを期待したい。

末筆になったが、本稿をまとめるにあたり、小野正文、保坂康夫、新津康、今福利恵、西桂町教育委員会の方々には文献、助言等で大変お世話になった。記して謝意を表する次第である。

註

1. 子母口式土器に関わる研究史については、毒島正明氏の研究に詳しい。
2. 中込遺跡発掘報告書（山梨県教育委員会・山梨県農務部、1990）参照
3. 調査は光波測量器を用いて全点プロットで進め、コンピューターで処理した。
4. 山梨県下では中込遺跡の他に絡条体条痕文土器を出土している遺跡は、南都留郡西桂町の寺野遺跡のみである。当遺跡から出土している絡条体圧痕文土器は、裏面に条痕をもたないものが多いが、裏面に条痕の施されるものもある。断面三角形の貼りつけ隆帯を使用し、隆帯の上にも施文される。表裏の条痕文土器を伴出する。編年的にはやや幅をもっていると思われるが、主体は中込遺跡のものより一段階古いのではないかと考えている。
5. 小熊 1989. 小熊氏は資料を詳細に分析し新潟県地方の編年案を示している。そして、その出現と終息を関東地方や東海地方も含めて考えるべきであるとしている。具体的には関東・東海・東北の影響のもとに成立し、東北の縄文条痕系土器群の影響を受けながら収束する傾向が見られるという。注目すべき研究であろう。

引用文献および主要参考文献

- 荒井幹夫ほか 1978・1983 『打越遺跡』（富士見市教育委員会）
奥 隆行ほか 1982 『寺野遺跡発掘報告書』（西桂町教育委員会）
小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文の一様相」『信濃』41－4
小沢由香利ほか 1986 『梨久保遺跡』（岡谷市教育委員会）
小野正文ほか 1986 『釧迦堂Ⅰ』（山梨県教育委員会・日本道路公団）

- 神奈川考古同人会縄文グループ編 1983 「縄文時代草期末・前期初頭の諸問題 土器集成図
録」『神奈川考古』17
- 神奈川県考古同人会 1984 「縄文時代草期末・前期初頭の諸問題、記録、論考集」『神奈川県
考古』18
- 紅村 弘 1981 『東海先史文化の諸段階』
- 児玉卓文^{ほか} 1984 『長門町 中道』(長門町教育委員会)
- 小林康男^{ほか} 1985 『堂の前・福沢・青木沢』(塩尻市教育委員会)
- 笹沢 浩^{ほか} 1975 『男女倉』(長野県道路公社・和田村教育委員会)『長野県中央道埋蔵文化
財包蔵地発掘調査報告書 原村その5』(日本道路公団名古屋建設局・
長野県教育委員会)
- 原田昌幸 1984 「絡条体圧痕土器研究の検討の課題」『神奈川考古』18 (神奈川考古同人
会)
- 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の再検討(上)」『土曜考古』7
- 百瀬忠幸 1986 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』(日本道路公団名古屋
建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター)
- 守矢昌文^{ほか} 1986 『高風呂遺跡』(茅野市教育委員会)
- 宮下健司 1988 「時代と編年 縄文早期の土器」『長野県史 考古資料編4』
- 宮下健司 1989 「東海系土器様式」『縄文土器大観1』(小林達雄編集 小学館)
- 山内清男 1941 『日本先史土器図鑑』(先史考古学会)
- 浅利 司^{ほか} 1990 『中込遺跡』(山梨県教育委員会・山梨県農務部)